

氏名(本籍)	向野康江(福岡県)
学位の種類	博士(芸術学)
学位記番号	博甲第1,297号
学位授与年月日	平成6年3月25日
学位授与の要件	学位規則第5条第1項該当
審査研究科	芸術学研究科
学位論文題目	関衛研究 —関衛(せき・まもる、1889-1939)と大正期芸術教育思想の展開—
主査	筑波大学教授 仲瀬律久
副査	筑波大学教授 芸術学博士 真保亨
副査	筑波大学教授 文学博士 相馬隆
副査	佐賀大学教授 芸術学博士 宮脇理

論文の要旨

本論文は、大正期の芸術教育について、関衛(せき・まもる、1889-1939)の活動にスポット・ライトをあてて、明らかにしようとするものであり、教育学、図画教育、文芸、美術に対して有機的な相互関連を保持しながら研究を進めた関衛の、研究の拠点と芸術教育における理想について論及しつつ、歴史上の関衛の位置を明らかにすることを通じて従来とは異なる観点にたって精査し、論述しようとしたものである。

その論点は、①近代日本の芸術教育思潮の展開を西洋哲学の導入と解釈の展開として把握し、西洋哲学と「東洋の解釈」の合致を関衛の芸術教育論によって把握すること。②関衛の著書の内容を分析し、彼の芸術教育論が、教育史上あらゆる芸術を含む文化論と陶冶論を要とした教育論の中で語らなければならないとして、その特徴を人格陶冶論に置き、彼の所説を分析して明確にすること。③美術教育史上埋没していた関衛という人物の経歴を明らかにし、後世において忘れられた原因を考究することにある。

本論文の構成は、「序章」ならびに「第一部 関衛の生涯」「第二部 関衛の芸術教育論とその特質」「第三部 芸術教育論の社会背景と関衛の歴史的な位置づけ」および「結章」より構成されている。

序章では、関衛の執筆活動について、現在、確認し得る論文および著者を各々の表にまとめて提示し、関衛の芸術教育論は、思想史の中で語られるべき問題であることを命題化し、それは、大正期芸術教育思想の総合的理解の中でなければ、正当に解釈できないことを説いている。

第一部、第一章「関衛の生涯」では、関衛とその経歴を客観的事実によって浮き彫りし、「経歴の記述」という手順に従って明確に詳述している。そして、彼の足跡が消去されてきた原因についても

論及している。第二章「教師・関衛の登場」では、関衛の論壇登場の様子について述べ、小学校教員時代および活水女子専門学校中等教員時代の関衛像を雑誌における活動から推察し得る関の心の中を探る方法で論じた。第三章「関衛の東京における活動」では、関衛の東京における実践的な活動について論じ、この時期の芸術教育論についての著書とその周辺を分析してある。また、南蛮美術への関心と神学校の美術科に関する記述を分析してその特異点を論じ、関が美術史へ傾倒していく様子を中心に、彼の心の動きについて論じている。

第二部では、関の高い批判能力による痛烈な批判を起点に、彼の思想を把握することにつとめている。第一章「『新定画帖』および自由画教育運動に対する批判と児童画研究による児童画観の成立」では、『新定画帖』および自由画教育運動の批判が、その教授法が児童の発達と適合していないことに対するものであることを確認し、その批判の根拠が心理学に基づく児童画研究にあったことや、関が図画教育に興味を持ち始めた理由を含めて、彼による初期の図画教育研究の内容を分析し、児童研究、児童画分析によって児童画観を確立していった経緯についてまとめている。第二章「現代芸術への批判と人格陶冶」では、関衛による現代芸術に対する批判を分析し、美的判断と感情移入の作用について論じ、さらに、第三章「理想的人間像の追求」では、感情移入による情操陶冶がもたらす理想的人間像すなわち理想的人格が、どのようなものであるか分析している。第四章「美的教育から図画教育へ」では、関に最大の影響を与えたと考えられる小西重直による趣味教育論の特徴を分析し、彼の「趣味教育が国民教育に必要な理由」について述べ、関の芸術教育理論において、美的教育論から図画教育論へ変容していく様子を究明している。

第三部では、第一章「大正期の社会情勢」において、関衛による芸術教育論形成の一般的社会背景と大正期の教育学会と芸術教育運動の導入について論じ、第二章「趣味教育思潮」では、趣味教育の興隆の要因を美学の導入に関連して究明している。また、この時期における芸術教育論の開を精査し、大正13年が芸術教育思潮の最高期であったことを明確にしている。第三章「大正期教育学者による主張」では、芸術教育に関する所説と美的教育学説に対する意見、文芸主義教育に対する教育学者の意見、自由画教育運動に対する教育学者の意見、教育学者の芸術教育主張を分析している。第四章「図画教育界の動向」では、大正期が「教育的図画」の研究時代であり、白浜徹のドイツ芸術教育運動に対する見解が図画教育界を教育学から孤立させてしまったことを考察している。第五章「長崎における美術教育運動—『新定画帖』推進運動—」においては、長崎における美術教育運動、すなわち岡登貞治の『新定画帖』推進運動や長崎県に対する白浜徹の心情について触れながら、それを雑誌『長崎県教育雑誌』の役割と共に考察している。また、結章「関衛の歴史的な位置づけ」では、関衛が図画教育を芸術教育にまで高めようとした芸術教育思想家であり、大正時代にかぎって登場したいずれの制度的グループにも属さない研究者であったことを結論づけている。

審 査 の 要 旨

本研究の持つ意義は、まず第一に、歴史的な名著を残しながら経歴不明の謎の人物といわれた関衛と

いう人物像を美術教育史上に新たに位置づけたことにある。第二に、大正期における学問の普及ならびに専門化という現象を関衛像によって論証しようとしていることがあげられる。そして第三に、日本の近代芸術思想の展開を関衛を関衛の芸術教育論の歴史的な位置づけを行う経緯のなかで把握しようとしていることである。

これらを実証するために、著者は長期間に亘って綿密で堅実な実地調査を行い、その貴重な成果を様々な角度から分析、検討して、関衛の人となりや思想のよって来た所を明らかにしていることは高く評価される。また、関衛の芸術教育論は、広く思想史の中で語られるべき問題であるという認識にたつて、大正期芸術教育思想の研究にさきがけようとしていることは独創的であり、関衛の思想の展開を解明することによって、美術教育史研究における新しい視点の開拓に寄与している。その点、後学のために資するところも大であると思われる。

とはいえ、本論文には、今後さらに考究を重ねていくべき課題も少なからず残されている。例えば、その一つに、多くの主義主張なかんずく当時日本にもたらされた海外の思潮に対する解釈をより一層緻密に行うことにより論述がより明確になるであろうという示唆がなされていることがある。その他にも本論文には、課題として残されている問題もあるが、美術教育史上これまであまり顧みられてこなかった一人物像に新たな光を与えることによって、歴史の全体像の見直しを迫る本研究は画期的であり、関係学会に新風を吹き込むことが大いに期待される。

よって、著者は博士（芸術学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。